



勉強は「受ける」ものではなく、  
「取りに行く」もの！



**勉強することで世界が広がる！**  
**授業でそれを体感して欲しい**

爽やかな五月晴れの5月14日。中学3年生に向けて、第1回目のStudy It Yourself授業が行われました。西岡講師を迎えての初授業とあって、みんなやや緊張の面持ちです。これからどんな体験が彼・彼女たちを待っているのか。そして、1年を通してどのように成長していくのか。詳しくレポートしていきたいと思います。

**誰かが本気で言う言葉には**  
**本気の眼差しを向ける必要がある**

中学3年生初のS I Y授業は、西岡講師のこんな言葉で始まりました。

「皆さん、授業を受けるという言葉を英語で何と言うかわかりますか？」  
突然の投げかけに戸惑う生徒たちに向けて、西岡講師がマイクを向けます。マイクを向けら

れた生徒は、「listen to a class」や「do a class」など、自分なりの答えを考え、発表していきます。

この問いの答えは、「take a class」。自分から授業を能動的に取りに行くという意味だそう。聞いているだけの「listen to a class」では、せっかくの授業も身にならないのだと、西岡講師は熱く語ります。

「東大では、授業が終わると生徒がこぞって先生に質問に行きます。頭が良い東大生が自ら質問に行くことに、僕も最初は驚きました」。そう自身の体験を語る西岡講師。「皆さんも、僕の言葉に真剣に耳を傾けて、積極的に情報を取りに行く。そんな意識で臨んでください」と続けます。

「この授業は、受け身では通用しない」。そんな想いを抱いたのでしょうか。西岡講師の話の深く頷きながら聞く生徒の姿も。その様子を見た西岡講師は、「誰かが本気で言う言葉に対しては、本気の眼差しを向ける必要があります。頷くことも、Take していることです。その姿勢を忘れないでください」。と、温かいまなざしで生徒たちに伝えました。



## 志望校に合格することだけが 勉強のゴールではない！

次に生徒たちに問いかけられたのは、「なぜ勉強するのか」という質問でした。周りと相談して、自分なりの考えを述べてみるという指示が出ます。

一方的にインプットするのではなく、まず生徒に自分で考えさせ、アウトプットさせるのも、S I Y授業の特徴の1つ。こうして生徒たちの自主性を育てていくのです。

人前で意見を発表することが苦手な生徒も、グループワークを通して、積極的に意見を出せるようになってきました。主な内容としては、

「自分の能力を発揮するため」、「東大に行くため」、「世界の様々な問題を解決するため」、「自分の選択肢を広げるため」、と、さまざまな意見が発表されました。

「受験勉強は、目的の1つでしかありません」と話す西岡講師。自身が偏差値35からスタートして東大に合格したエピソードを交えながら、勉強は実は楽しいこと、そして、勉強は、これからの人生にも役立つことを伝えます。

「このプロジェクトは、「皆さんのやりたい」をサポートする」プロジェクトです。皆さん一人ひとりが自分の未来に向けて、挑戦を始めていけるように応援していきます。」そんな西岡講師の真摯な言葉は、生徒たちの胸にもしっかりと響いたよう。西岡講師に向けられるまっすぐな眼差しが、とても印象的でした。



## 勉強をすると、世の中のことが より理解できるようになる

授業の中盤では、「勉強をすることで世界が広がる」ということを生徒に実感してもらうべく、いくつか問題が出題されました。

その1つが、4つの時刻表を見て、それぞれが①成田空港の上海行時刻表、②東京郊外の住宅団地のバス停のもの、③人口約10万人の地方都市の駅前のバス停のもの、④人口約5000人の山間部のバス停のもの、どれにあたるのかを問う問題です。

バスの頻度、時間帯などから、どの路線かを推察するこの問題。生徒たちも積極的に周囲と相談し、自ら手を挙げて回答していきます。授業の冒頭と比べても、明らかに積極性が増している様子から、早くも「take a class」を実践しようとする姿勢が見て取れます。

回答した後、「実はこのバス停の問題は、東大の過去問です」と、ネタばらしをする西岡講師。「入試問題では、このように生活に密着した問題もあるのです」と話します。

東大の入試問題は難解だと思っていた生徒たちにとって、この問題はとても意外だったと同時に、新たな発見になったようです。

身近なことが問題として出題されること、勉強することが身近な生活に役立つことを知り、彼・彼女たちの世界も広がったようです。